大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

ゲーレンの人間学とその経済社会へのひとつの応用

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2011-09-12
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 長屋, 泰昭
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004762

ゲーレンの人間学とその経済社会へのひとつの応用

長　屋　泰　昭

はじめに

人間はどのように生存を確保または維持することができるか。この問題はあらゆる社会科学，とりわけ経済学や経済社会学の最も重要な問題の一つといっても過言ではない。我々が関心をもっている経済社会の調整問題も，かような問題と無縁ではない。否，生存に必要なすべての物財（または生活資料）が唯一人の人間によって，しかもその社会のすべての人間の必要を満たすに十分なだけ調達され得るならば別であるが，そうでなければ，関係する人々の活動―生産活動や消費活動のような本来の経済的活動だけでなく，近年のように，政府の政策に影響を及ぼすことを通じてよりよい物財の調達を図ることもできるから，そうしたいわゆる政治的行動も―や利害を相互にいかに調整するかは人間の生存の確保または維持にとってきわめて重要な意味をもつ。

ところで，人間の生存の確保の問題は根本的には人間存在の在り方の問題にかかっている。人間がどのような存在であるかによって，人間の生存の確保の仕方も異なるからである。ただ，人間存在の在り方については，これまでいろいろな解釈がなされてきている。本稿で取り上げるゲーレン（A. Gehlen）の人間学（Anthropologie）もその一つである。彼は，本文で詳しくみるように，人間の生物学的な生存条件（biologische Existenzbedingungen）から人間存在の問題を説明しようとしている。ここに彼の人間学の一つの大きな特徴があ

ると同時に限界もある—例えば，人間の尊厳の問題。が，人間の生存の問題と人間存在の問題とが直接結びつけられて説明されている点，および人間が生存を確保していくために必要とし，ゲーレンの人間学の中心概念とされている「行為」(Handlung) の概念が，彼自身も述べているように，経済学で用いられている労働の概念に近いという点は大変興味深い。哲学者—それだけには限定されないが—であるゲーレンの人間学が，同じくドイツの学者で経済社会学者であるヘルダー・ドルナイヒ (Ph. Herder-Dorneich) によって批判的に継承・発展させられて経済社会の分析に応用されている大きな理由はそこらあたりにあるように思われる。そして我々がゲーレンの人間学に注目するようになったのは，そうした応用のうえに独特の経済システム論と経済秩序論—いずれも経済社会の調整問題を主たる対象とする—を打ち立てようとしているヘルダー・ドルナイヒの影響によるところ大である。

以上のことから，本稿では，まず，ゲーレンの人間学について若干詳しく考察し，[(1)] 次いで，それをヘルダー・ドルナイヒがどのように批判的に継承・発展させて経済社会の分析に応用しようとしているかをみてみたい。[(2)] それ以上の考

---

(1) 本稿で取りあげるゲーレンの文献は，主として次のものである。

① Anthropologische Forschung, Hamburg 1961.

② Zur Systematik der Anthropologie, in: Studien zur Anthropologie und Soziologie, Soziologische Texte Bd. 17, hersg., von H. Maus und F. Fürstenberg 1963.

なお，上述の論文に関しては，二つまとめて，以下のような一冊の翻訳書が出版されている。本稿での関連する箇所の頁数は，その翻訳書のものである。

亀井 裕・滝浦静雄他訳『人間学の探求』紀伊国屋書店，1979年。

(2) ヘルダー・ドルナイヒについては，次の文献を参照。

① Anthropologie des pluraristischen Zeitalters, in: Soziale Verantwortung, hersg. von J. Broermann und Ph. Herder-Dorneich, Berlin 1968.

② Wirtschaftsordnugen, Berlin 1974.

なお，前者の論文の主要な部分はほとんどそのままの形で後者の書物のなかに取り入れられているので，本稿では後者の書物を主として取りあげた。したがって，関係する箇所の頁数は②の書物のものである。

察，例えばヘルダー・ドルナイヒの経済システム論と経済秩序論の詳しい検討などは，別の機会に譲らざるを得ない。

I　ゲーレンの人間学の特徴

1　哲学的人間学

さて，ゲーレンの人間学の第一の特徴は，「哲学的」(philosophisch) とよばれるところにある。その意味するところは，人間の個々の特質や側面ではなくて，人間の全体像を明らかにするということである。すなわち，人間を研究対象とする個別科学には生理学，心理学，言語学，社会学など，多数のものがあるが，それらの「個別科学の境界をのりこえて人間というものの全体について陳述をおこなうこと」(p. 12)，別言すれば，かかる個別諸科学すべてを貫くような形の人間学を構築すること (p. 136)，これが哲学的という言葉で意味されていることである。そしてさらに留意されるべきことは，そうした人間学は同時に「科学的」(wissenschaftlich) であるべきことが強調されていることである (p. 12)。ここで科学とは，正確にいえば，経験科学を指す—ゲーレンのもとでは，経験的な学問が科学であって，それ以外は形而上学とよばれる。かくして，哲学的—上述の意味における—であるとともに経験科学的な人間学，これがゲーレンの求める人間学である。

ところで，ゲーレンによれば，生理学などの個別諸科学は人間のある側面だけを研究し，他の側面は不問に付すがゆえに，人間というものの全体像を十分に体系的に説明することはできない (p. 83)。が，こうした個別諸科学に対する批判は決してめずらしいことではない。これまでにも，ゲーレンと同じように，個別諸科学の限界を説き，一つの包括的な，一般的な人間学を追い求めた人々は多い。では，従来の哲学的人間学のどこに問題があったのか。この点に関するゲーレンの見解は以下のとおりである。

ヨーロッパ哲学の多くが神学に束縛され，神学の解釈部門として成立していた17世紀以前においては一つの独立した哲学的人間学なるものはなく，人間に関する問題は多くは神学の枠内で論じられ，人間を創造し，物的な身体と精神的，個別的，不死なる魂とを結合したのは神であるとする神学的解釈が支配していた。ところが，自然科学の発達とそれに伴う世俗主義の台頭などによって哲学が神学から解放されてくるにつれて，「人間とはなにか」という問題が新たな範疇をもって提起され，また答えられざるをえなくなってくる。かかる問題に「精神と物質の二元論」(Dualismus von Materie und Geist) で答え，後々の世代の思考様式に多大な影響を及ぼすことになったのがルネ・デカルト (R. Descartes) であった。かれは無神論者になるでも，創造のテーマを明確に否定するでも提起するでもなく，それをいわば括弧に入れてしまって，人体を他の諸物体と同様ひとつの物体—精巧な機械に比せられる—とみなし，それぞれが異なる原理と属性をもつ二つのカテゴリー，すなわち物体（物質）と精神との結合体—「舵手がその船に乗るように，精神が人体に宿るのではない」ことが強調される—として人間を捉えた。(3) その後，ドイツ観念論などの台頭によってかかる二元論的思考は後退したが，それは一時期のことにすぎず，やがて再び，しかも神学的色彩をより一層希薄化あるいはさらには払拭しながら多くの人々に継承されていく。が，何世紀にもわたる思索にもかかわらず，身体 (Leib) と心 (Seele)（または精神）とが究極的にいかなる関係を互いに保っているかということについてはなんら確信のもてる結果は達せられなかった (p. 77-90)。

---

(3) デカルトの二元論的人間観については，落合太郎訳『方法序説』岩波書店（岩波文庫），1988年，および桂寿一訳『哲学原理』岩波書店（岩波文庫），1987年を参照。なお，人間の身体を機械に譬えている箇所と舵手の譬えはそれぞれ前者の書物のP.69と72を参照。

こうして，ゲーレンは従来の哲学的人間学のなしえなかったこと，すなわち人間の二つの側面，つまり心理的あるいは精神的側面と身体的側面とを統一的に説明し，以て，それ自体として「単一性」(Einheit) もしくは「全体性」(Ganzheit) を有する人間の正しい姿を描き出すこと，しかも経験科学の枠内でそれを試みること，これを自らの人間学の主たる課題とした (p. 13-14, 83)。そしてその課題を達成するためには，二元論に立ち至るべき設問法や概念構成を一切中止して，新たな問題設定と概念構成をすることの必要性が強調される (p. 90)。その際，人間の全体性に最も適合するやり方が選ばれるべきだとして，因果関係ではなく，「条件の連関」が問われる。すなわちAなしにはBはなく，BなしにはCはなく，CなしにはDはないなどの条件連関を求め，この系列を再び逆に遡れば—Zなしには Aなし—人間の全体像が理解されるという。原因という概念は個々の連関を孤立化させ得る場合にのみ，したがって純実験科学の内部でだけ意味をもち，人間学のような非実験科学のもとではかかる孤立化は短絡的となり，現実にそぐわないというのがその理由である (p. 23-24)。そして人間の成立の問題，言い換えれば創造のテーマに関しては，次のように主張される。「人間学といってもそれが直ちに無神論につながるとは限らぬ……，さりとてまた必ず神の問題を提起するわけでもない……。これが……私の立場でもある。」(p. 76) と。これは，創造のテーマに踏み込まずに，あくまでも経験科学の領域にとどまって，そこにおいて一つの包括的な人間学を構築しようとする，そしてまた構築し得るというゲーレンの強い意志と確信を示している。

2　生物学的方法

それでは人間の二つの側面は経験科学的にいかに統一的に説明され得るか。これに対するゲーレンの答は次のとおりである。「人間の自然的・肉体的側面

と内面的・精神的側面とを巧みに考えあわせることが可能になるのは，唯一つの条件の下でだけ，つまり或る生物がいかにして自己を保存し，その生存をひきのばしていくかという生物学的見地に立って，人間は，まさに一定の自然的特性によって，知的で予測的に行動すべく余儀なくされているのだということに気づく場合だけである。」(p. 23) と。ここにはゲーレンの人間学の真髄が簡潔に語られていると同時に，そこから彼の人間学のいま一つの特徴が知られる。「生物学的思考方法」(biologische Denkweise) がそれである。(4)

ゲーレンによれば，人間自体の問題を論議するのではなく，一つの比較，しかも人間と神との比較ではなくて，人間と（他の）動物との本質上の相違を問うことによって，生物学の問題を哲学的人間学のなかに取り入れたのはマックス・シェーラー (M. Scheler) である。それまでは生物学の問題は「自然人類学」—それはもともと動物学の補充として頭蓋骨の測定を中心とした人間の身体の研究をすると同時に，また人種の研究，のちに民族の研究をもするようになり，そして時が経つうちに特殊化が進み，いくつかの科学に分化し，そこから例えば今世紀に入って独立の優生学または遺伝学が成立してくる—として動物学者や医学者または植物学者（優生学者）に委ねられ，専門分化的に研究されたにすぎなかった。その意味で，1928年に公にされた『宇宙における人間の地位』というシェーラーの問題の小冊子は「エポックメーキングなもの」として高く評価される (p. 86-88)。この書物のなかで，シェーラーは「植物ならびに動物に対する関係における人間の本質および人間の形而上学的特殊地位」について考察し，デカルト的な二元論に対しては，それによっては動物と共通

(4) ゲーレンは，別の書物で次のように述べている。「ある考察を生物学的とよべるのは，ある生物がいかなる手段を講じて生きるかを問いつめるからだ，そう言ってよいのではないか。」と。Vgl. A. Gehlen: Der Mensch, Seine Natur und seine Stellung in der Welt, Akademishe Verlagsgesellschaft Athenaion, 12. Aufl, Wiesbaden 1978 (Original; 1. Aufl, Berlin 1940), S. 17 (平野具男訳『人間』法政大学出版局，1987年，p.12)。

する人間の「生」(Leben) ―それは「身体的なもの」(Leiblichen) と「心的なもの」(Seelischen) の双方から捉えられ，両者は「同じひとつの生の経過の二つの側面」と解される―は説明され得ないと批判を加え，「精神」とは区別される，もちろん「物質」(または身体) とも異なる「心」(または霊) の位置づけを問題としている。そしてデカルトのように「物質と精神」によってではなく，「生と精神」―これらは「他に還元できない二つの根本的なカテゴリー」とよばれる―によって人間を理解することが試みられる。(5)

ところで，シェーラーが新たに開拓した論点のうち特記すべき点として，三つの点があげられる。(i)人間と動物との比較から出発をしていること，(ii)人間の「世界開放性」(Weltoffenheit) の教説―(他の) 動物のように特殊な環境にはめこまれていない，したがって人間にとって良かろうが悪かろうが，任意のさまざまな外界の所与から印象や刺激を受け得るという説―を立てたこと，(iii)心的なもの，例えば感覚，記憶，感情などを生命現象として捉え，本来の生物学的なものと区別せず，他方そうした「生」全般に対立する人間的な原理を「精神」―その本質は「脱現実化」(Entwirklichung) という作用を遂行し得る点，言い換えれば生物学的なものの圧迫から，また生命の依存から解き放ち得る点にあるとされる―とよんで，それらとはっきりと区別したこと，がそれである (p. 88, 90)。これらのうち特に前者二つを，ゲーレンは自らの人間学のうちに取り入れる。問題は，心をもった身体 (簡単に示せば身体・心，あるいは生) と精神との関係がシェーラーによってどのように説明されたかである。これについてゲーレンは次のように述べている。「精神は単に生とは別のものというにとどまらず，シェーラーにあっては本来世界とは別の何かあるも

(5) シェーラーについては，次の書物を参照。Max Scheler: Die Stellung des Menschen im Kosmos, in: Max Scheler・Gesammelte Werke, hersg. von M. S. Frings, Bd. 9, Bern 1976 (亀井裕・山本達訳「宇宙における人間の地位」，飯島宗享・小倉志祥・吉沢伝三郎編『シェーラー著作集13』白水社，1982年)。

のであり，単に彼岸において人間の心と身体とに関連をもち得るわけであるが，その彼岸というものについては彼は何ら述べることをしなかった。」(p. 89) と。かくして，シェーラーのもとでも心身の問題あるいは身体・心と精神の問題は十分な説明を与えられず，「シェーラーは古来よく知られている二元論の位置をずらした（筆者注：心身の二元論から心をもった身体と精神との二元論へ）にすぎない」(p. 88) と批判される。

こうして，シェーラーに拠りながらも，新たな生物学的見地もしくは設問法にもとづいて彼独自の人間学をゲーレンは展開していくことになる。その際，さまざまな動物学者や解剖学者，特にユックスキュル (J. J. von Uexküll)，ボルク (L. Bolk)，ポルトマン (A. Portmann) らの研究成果が引き合いに出され，「新しい哲学的人間学の新しい流派の成立は，一種のチーム・ワーク，それも取りきめによらぬチーム・ワークを思わせるものがある。」(p. 96) と述べられ，ゲーレンの人間学がそれとは独立の他の多くの研究結果と一致することあるいはそれらによって裏付けられていることが強調される。

3 行為と文化の概念

ところで，ゲーレンの人間学のさらに一つの，しかし最も重要な特徴は，「行為」としたがってまた「文化」(Kultur) というものをもとにして人間の全機構は理解し得るという仮説を立て，この仮説を立証しようと試みている点にある (p. 17)。ここで「行為」とは，「何かを目ざして着手すること，あらゆる仕事の過程」(p. 17)，より厳密には「予見と計画に基づいて現実を変化させること」(p. 17) を表す言葉として用いられ，その中心には，のちにみるように，本来の自然に対する計画的変更が置かれている。だから，「人間の目的に合わせて自然に変更を加えることを目ざす活動」(p. 90) とか「行為という概念の代わりに，十分に近似値をもつものとして労働という概念を置き換えてもさしつかえない」(p. 19) といわれ，そこからまた「技術」(Technik) の問題

が重視されるのである（pp. 218-235）。この点に，ドイツの経済社会学者，ヘルダー・ドルナイヒがゲーレンの人間学，とくにそのうちの行為に関する議論を経済社会の人類学的考察に応用している一つの理由があるように思われる。このことはすでに述べた。が，ここで正確さを期するために，次の点も併せて述べておかねばならない。すなわち，すぐあとでみる「文化圏」が人間にとっては「自然圏」とみなされ（p. 35-36），さらに他の人間やあるいは自分自身に対して計画的に影響を及ぼすことも「行為」のうちに含められている（p. 20），というのがそれである。それに対して，「文化」はそうした行為によって「変化させられた，ないしは新たに作られた事実と，それに必要な手段との総体」（p. 17）として定義され，「物的手段」だけでなく，「表象的手段」—解釈，理論，制御の動機など—も，したがってまた教育，指導，支配，社会的また家族的構成などの意味における人間相互の活動もそれに含められる（p. 17，26）。ついでにいえば，「社会」(Gesellschaft) という言葉も行為によって規定され，「具体的かつ他のものと区別し得る諸集団が協働する時」（p. 17）に用いられる。ただし，人間にとっての社会もしくは協働の必然性とその根拠などについては必ずしも明確ではない。この点については，本稿の最後のところで再び触れる。

さて，既述のところから知られるように，ゲーレン自身，人間が心と身体とを，あるいはシェーラー流にいえば，心・身体と精神とを併せもった存在であることを否定はしない，それどころかそのことを認めるがゆえに彼はそうした二つの側面の関係を厳しく問うているともいえるのである。もとより，次のようにも述べられる。「一つの—まず大筋は人間学・生物学的—見地，すなわち人間独特の身体性状を，その複雑に入りくんだ『内面性』もろともに一丸として，心身の直接的連絡のありようを垣間みることは，けだし永劫に私たちにかなう業ではない」と。しかし，「特別の基本概念（カテゴリー）を用いて，せ

めて近似的にこれを捉える見地ならば可能である」と主張される。[6] が，すでにみたように，従来の哲学的人間学のもとでは心身あるいは心・身体と精神の関係は近似的にも十分満足のいく形で説明されなかったとして，設問法を変えて，新しい見地，すなわち人間という生物がいかなる経験的条件のもとで生存し得るかという見地に立って人間を捉え直すことの必要性が強調される（p. 23)。行為と文化という概念はまさにそうした新しい見地に立って人間の全体像を正しく捉える—ということは，また，人間の二つの側面を統一的に説明する—ための手掛かりまたは鍵を与える基本概念として位置づけられるものなのである（p. 16, 90, 92)。なにゆえにそうであるかは，章を改めて追及したい。

なお，行動科学で用いられる行動概念とゲーレンの人間学での行為概念との関係については，前者にはしばしば他の動物にも共通する身体的運動（反射運動をも含めて）も含められるのに対して，[7] 後者にはいわば人間に固有な運動のみが含められるという点にその違いがあるといえるが，いずれの学説も行動，行為という人間の一つの働き，つまり機能から出発して人間とその社会の全体像に迫ることが可能であり，しかも経験科学的にはそのようなアプローチが不可欠であるとしている点では，どちらも思考様式または研究方法の面において「機能主義」(Funkutionalismus) の立場に立つといえよう。[8]

（6） ここの二つの引用箇所については，Gehlen: Der Mensch, S. 15（平野訳『人間』p. 10）を参照。

（7） 行動科学に関しては，関寛治・犬田充・吉村融『行動科学入門』講談社，1971年を参照。

（8） Vgl, Herder-Dorneich: Wirtschaftsordnung, S. 13.

Ⅱ　ゲーレンの行為論

1　「欠陥生物」としての人間と行為

ゲーレンの人間学の基礎をなすのが行為―文化も行為から捉えられている―に関する論述，いわゆる行為論であることは上述のところから明らかであろう。そこで問題は，なぜ行為というものが人間を捉えるための手掛かりまたは鍵とみなされるかということである。これは，人間の生存条件の問題を新たな出発点として，そこから人間把握へと進もうとするゲーレンのアプローチの仕方に密接に関係している。

ゲーレンによると，人間を含むすべての生物の生存条件はそれぞれの「身体的もしくは器質的特質」(physische oder konstitutionelle Besonderheiten) に決定的に依存している。いま人間と人間以外の動物とを比較すると，[(9)] 後者は身体的にあるいは器質的に「特殊化」(spezialisiert) されているために，その特殊な保護手段や器官―毛，甲殻，鋭い牙や爪，特殊な遁走能力など―によって環境のある一定部分に対して「生まれつきの確実さと正しさ」で対処することができる。が，他方において，まさにかかる器質的特質のゆえに，動物はその種に固有な環境 (Umwelt) のうちに囚われて，異なった環境へ「移り込む」ことはできない。そしてその限られた環境のなかにおいて動物は生れつきの正確さをもって行動しているのである。そのような行動が「本能的行動」とよばれるものである。動物に学習能力が認められるとしても，それはかかる「生れつき固定した枠内」でのことにすぎない。その意味で，「環境という概念と，環境に適応し，また内応するという概念は，動物学には不可欠のものである」(p. 27)。

それに対して，人間は器質的に特殊化されていないために，言い換えれば

---

(9)　以下の比較については，ゲーレン，亀井・滝浦他訳『人間学の探求』特に，p.25-39, 44-48, 91-92, 138-143, などを参照。

「胎児的生態」を保持する—このことを「停滞」(Retardation) という—ために,「生物体としての武器または保護手段に欠けるところ多く, その本能は不確実で退化し, 感官の働きは貧弱である」(p. 91)。つまり, 人間は器質的には「手段なき」(mittellos) ものであり, ここから人間は「欠陥生物」(Mängelwesen) とよばれる。[(10)] したがって, 生まれつきの体と本能とだけをもってしてはどんな自然環境のもとでも人間は生存することはできない。そこで, かかる欠陥を埋め合わせるために, 人間は「第二の自然」(Zweite Natur), すなわち「技術的に加工され適合的にされた代償世界」—「人間のそれほど役に立たない器官的装備をも受け入れるような世界」—を作り出さねばならない。それには (他の) 動物にはない特殊な能力を人間は不可欠とする。それが「自然を変更して自分の生に役立つようにする能力」であり, そうした能力に基づく自然変更の働きが行為とよばれるものである。かくして, 人間にとって行為は「生物学的に必然の過程」である。つまり,「自然によって甚だ疑義の多い仕立てられかたをした人間という存在は, 自分自身のあやふやな生存可能性を支えるためには, 変更を加えられた自然を用いざるを得ない」(p. 92) のである。そのような, 人間によって変更を加えられた自然—「第二の自然」—が文化領域とよばれるものである。そしてそうした文化創造的活動によって, 言い換えれば自然条件を変える計画的な活動, すなわち行為によって人間は至るところで—極地や赤道直下で, 水上や陸上で, 森や沼地などで—生存することが可能となるのである。

こうして, 人間はその一定の自然的特性から「行為する生物」(handelndes Wesen) として捉えられなければならぬこと, したがって人間的なもろもろの営みや特性も行為から理解され得ることが強調される (p. 143-144)。ともあ

(10) この言葉はもともとゲーレンと同じくドイツ人で, 牧師にして文士であるヘルダー (J. G. Herder) が『言語起源論』(1772年) で初めて使用した言葉である。この点については, ゲーレン, 平野訳『人間』における訳者の「解説」を参照。

れ，人間の生存条件を問うことによって，「意識から意識の存在を促したものへと逆推理をすること」により，「人間の文化創造的活動」と「人間の器質的な手段欠如性」とが「生物学的に密接に制約しあう」こと，したがって人間の「知性」とか「理性」などはここでは「いわば生物学的な生存条件のなかに組み込まれたものとして現れる」ことが明らかにされたことは注目に値しよう（p. 142-143）。

2　「世界開放性」と行為の構造

ここで，行為そのものの構造（または仕組み）についてもう少し立ち入ってみてみよう。人間が生存上行為を必要とするのは，ゲーレンによれば，動物のように，その種に適合した特殊な環境とその環境に適応した特殊な器官をもたないからであった。ということは，人間の世界は限りなく開かれ―「世界開放性」―，それによって「不意打ちの場」(Überraschungsfeld) として無限に多くの刺激にさらされ，衝き動かされている―「刺激過剰」(Reizüberflutung) と「衝動過剰」(Antriebsüberschuß)[11] ―ということである。したがって，行為に際し，人間はかかる刺激を整理加工して，過剰な衝動を抑制し，「方向定位」(Orientierung) ―分節，区別，抜擢，軽視など―をおこなうことが必要である（p. 41-42）。もとより，動物に与えられているような「合目的的な選別力」，言い換えれば「自然の知恵」というものがあって，それが生存上重要でないと知覚されるものを人間から遮断してくれるのであれば，話は簡単であるが，そのような働きをする特殊な器官は人間にはない（p. 145-146）。とすれば，人間はどのように方向定位をおこなうか。

---

(11)　ここにいう「過剰」とは人間をして「生命を維持確保するためという限界」もしくは「単なるその生物としての最小限度の欲求の限界」を越えさせる刺激や衝動を指す。そうした刺激や衝動は自然界からだけでなく，文化圏からもくる。この点については，ゲーレン，亀井・滝浦他訳『人間学の探求』p.58-71 を参照。

普通「道徳」といわれるものが方向定位の規準にされることが多い。が，ゲーレンは「道徳という……表現は，動かしがたい二元論的色彩を帯びているから，われわれはこの表現を捨てることにしたい。」と述べ，その代わりに「訓育」(Zucht) という表現を用いることを提案する (p. 21)。人間は（他の）動物とは異なって，その自然的特性から「確定されていない動物」(das noch nicht festgestellte Tier)（ニーチェ，F. Nietzsche）—「人間は『未完』であり，きっちりときめられておらず，自分自身が仕事の目的であり目標であるとともに，他面，そもそも人間とは何ぞやということが確定していない」という意味—であり (p. 22)，したがって「学習しつつ成長する」とみなされているからである。「人間を行為する生物として考える見かたのうちに道徳の問題を合わせて含むはずだ」(p. 22)といわれ，「人間以外に自分のもともとの本性を予見をもって能動的に変化させて生きていく動物はいないし，習俗的な掟や自己訓育をもつ動物もいない。」(p. 23) と主張される所以である。

ところで，「学習しつつ成長する」とは，ゲーレンによれば，「可視的なものの発見が，活動によってしか可能でなく，他方，運動能力の発達が，感覚的印象の系列の転変に付随して起こる」(p. 145) ということ，分かり易くいえば，いろいろ身体的運動—遊んだり，取り扱ったり，触れたり，握ったり，さらには声を出したりすること—を試みることによっていろいろな事物の性質や変化を知覚するが，そうした運動と知覚の対応関係を体得することによって，もはやいちいち試みなくてもそれがどのようなものであり，どのように変化し得るかを洞察することができ，それによっていかに対処すべきかを習得するようになるということを意味する (p. 120-121, 144-145)。その一つの例として，錠前の開け方があげられる。いま，ある鍵をもってきて錠前を開けようとする。ガチャガチャ試すがなかなか開かない。それを目で見，耳で聞いて確かめる。確かめた後，鍵を変えて再び試み，その結果を再び目で見，耳で聞いて確かめる。このようにして試行を重ねることによって，ついに鍵と錠前という平面で

成功が起こり，錠前がカチャと開くのを見る。それによってこれこれの錠前にはこれこれの鍵とこれこれの運動が合うこと，要するに錠前の開け方を人は習得する（p. 92-93）。

そしてそうした「学習しつつ成長する」—ここから人間は「学習する生物」（lernendes Wesen）（p. 94）ともよばれ，したがってそのもとでは「経験」（Erfahrung）が重きをなすといわれる（p. 60, 104-133）—ということのうちに，実は人間の方向定位の仕方というものが示唆されている。すなわち，人間は身体的運動と知覚の対応関係を習得することによって多様な刺激を整理加工し，過剰な衝動を抑制して，方向定位をおこなう術を知ると。ゲーレンは次のように述べている。「視野全体に分節を与え，これに視覚上のシンボルを賦与し，前景的なもの（重要なもの）と背景的なもの（非重要なもの）とに分けて組織を与えることは各人みずからの働きでおこなわれるのであって，自分の運動の変化と知覚の印象の変化は相応ずるという経験を積んだ結果にほかならない」（p. 44）と。そして，「知覚領野に組織を与えることと絡み合って初めて運動自体が『知的』となり，運動の測り知れぬ広大な可塑性と組み合わせの可能性の少なくとも大部分が発達し得るのである。」（p. 42）と主張される。

以上のことは，同時にまた，「行為」の仕組または構造をも説明する。なぜならば，ゲーレンによれば，行為はまさに鍵と錠前の例にみられるような一つの「円環運動」，すなわち「目で見て確かめるというような心的中間項や自己の運動というような運動的な中間項を通じて事物の平面を行きつ戻りつしておこなわれる」過程，別言すれば「外界の事物を取り扱いの対象として，結果のフィードバックいかんによって態度を変える円環運動」として捉えられ得るからである（p. 93）。ここから，「人間の意識しておこなった行為は一つの遂行として，その実際の経過を考えれば，体験上全く不可分の独特の統一，問題以前の統一であり，『外部』と『内部』，心的と物的の相違ないし区別の可能性というものは，一つの行為の遂行の際には全然与えられていない。」（p. 16）といわ

れ，「行為を論点とすればあらゆる二元論を簡単に締め出すことができる」（p. 93）とも主張されるのである。もとより，次のこと，すなわち最初は試行的におこなわれていた運動が「指導され計画された運動」，すなわち行為になるのはどのようにしてかということはさらに説明を必要とする。

3 行為と「負担免除」

ゲーレンによると，「試行的運動」が「指導され計画された運動」，すなわち「行為」に移行するには「負担免除」（Entlastung）の過程を経なければならない。ここで，「負担免除」という概念は，生物学的に異常な条件下におかれ，それがゆえに生存上（他の）動物にはない負担を強いられた人間が人間らしい生活や方法を引き出すためにその負担を克服していくプロセスを指す言葉として用いられている（p. 51）。具体的にはすぐあとでみるが，では，なぜそのようなプロセスが行為成立のために必要なのか。これに関するゲーレンの説明は，以下のようになる。

行為，すなわち予見と計画に基づいて自然や現実に変更を加えることが可能となるには，「その場その場で見いだした任意の個々のものを『表象』によって時間的空間的に移し変え，また表象によってそれの上に他のものを重置することができること」（p. 32）が不可欠である。そのためには人間は，「感覚可能な現実態，否その都度背景として実際に感覚されている現実態に対しても恐ろしく不感症であって，逆に高度に複雑な暗示に対しては極度に敏感である」（p. 51）というように，言い換えれば「象徴的」に物を見る，つまり「事物の重たさ，硬さ，軟らかさ，湿り気，乾きなどという『交渉価値』を，本来は触覚印象であるのに，わざわざ手をさしのべたり他の運動器官を発動したりせずに，端的に見る」（p. 120）ようにならなければならない。このことは，別の面からみれば，「人間の態度がますます間接的になりゆくこと，事物との接触がますます軽視され，したがって自由にかつ変化に富んだものとなること」（p.

51）である。いつまでも「基本的経験」—事物との直接的交渉—に縛られ，それを反復せねばならぬとしたら，予見や計画という高度に人間的な作業はできなくなるからである（p. 121-122）。そこで，「人間の態度において重心がますます最高の，つまり一番骨の折れぬ，ただ暗示的な機能の方へ移っていくこと」（p. 53），これが人間の態度が未来を指向したものになるための，したがって予見や計画が立てられ得るための必須条件となる。「負担免除」の概念でもって具体的に意味せられているのは実はかかるプロセスである。

かような負担免除の過程は人間の物を取り扱う活動または運動の展開のうちに進行し，その進行とともに運動自体はますます「指導され計画された運動」となる（p. 53-54）。次のように述べられる。「知覚領野を一巡して，これに象徴の荷を負わせ，または暗示を用いてこれを集約し，かくして知覚領野を遠くに押しやることによって，同時に人間はますます高等な骨の折れぬ『小あたりに当たってみる』潜在的な機能を働かせるようになり，それとともに運動は行為，つまり遠くの目標を目ざして操縦され指定された行動となる。」（p. 54）と。そしてそうした行為能力の発達過程は自然や現実からの離脱とそれらに対する支配能力の発達過程を意味するから，「脱現実化」（シェーラー）にその特質を有するすべての精神的作業がかかる過程から理解され得るという（p. 39, 40, 117）。

ところで，ゲーレンは負担免除の機能を果たすものとして「言語」(Sprache) と「制度」(Institution) をあげている。前者は，負担免除の過程を「直線的」に推し進め，「状況からの解放の最後の仕上げ」をおこなうものとして重要視される（p. 55）。その理由は，次のように説明される。「知覚世界の上に自動的に広がっていく象徴方式，知覚世界との直接接触を貶める姿勢，ますます可変的暗示的になりまさっていく態度などがその生命の一般的法則に数えられることを考え合わせるとき，これらの法則が言語において最もはっきりと看取されることは，言語自身をもっぱら原理的立場から感覚運動組織の一つとして捉

えるかぎり，少しも驚くにあたらない。」(p. 54-55)，「われわれは一つの言葉，一つの自家製の象徴をもって一つの事物に立ち向かい，そのなかでこの事物を感覚的，聴覚的，象徴的に受け取り，しかもその言葉はわれわれが意のままに駆使できるのであるから，われわれは与えられた状況からは全く自由に解放される。いま・ここという時空の限界を思うがままに乗り越えて，世界は暗示のなかでわれわれにとって自在に扱えるようになる。」(p. 55) と。言葉のもつ特質をきわめて適確に言い表しているといえよう。

他方，「制度」については，「世界に開かれた人間がそれによって溢れるほどに満たされているさまざまの印象や刺激をくぐりぬける道案内」(p. 181) として，あるいは「人間の内面は余りにも動揺の多い領域であるから，……支柱のごとく外からの支え」(p. 100) として機能し，それによって多くの決定や不安から，したがって負担から人間を解放してくれると主張される。[(12)] が，問題は制度の中身である。いろいろな社会制度が考えられるし，現に存在しているからである。この点に関しては，次のことに注意したい。すなわち，人間は世界に開かれた存在であるから，規律，躾，刑罰，政治的な支配や指導の序列といった「上からの秩序づけ」ないしは「強制的圧力」が必要で，それらがないと人間はアナーキー的な精神状態に陥ることをゲーレンがしばしば強調しているということがそれである (p. 100, 126, 152, 184)。ヘルダー・ドルナイヒをして「ヒエラルヒー原理の世界はゲーレンの固有の世界である」といわしめた一つの大きな理由はそこらあたりにあるように思われる。[(13)]

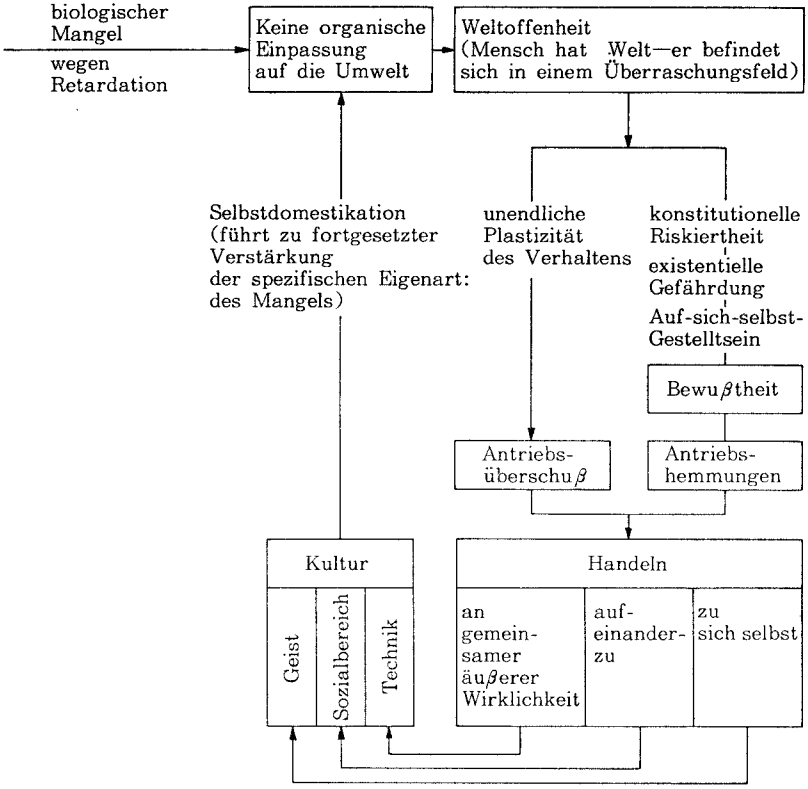
---

(12) 経済的制度や規範についてであるが，同じように，それらが人間の行動を制約する反面，人間に一定の行動規矩 (Verhaltenmuster) を提供することによって経済に安定性と継続性をもたらし，そのことによって人間に対して負担軽減的 (entlastend) に作用し，もって人間の創造的自由の領域を拡大すると述べているのは，パーロウ (W. Pahlow) である。Vgl. Pahlow: Wirtschaftliche Entwicklungsgesetze?, Berlin 1968, S. 24-25, 134, 140, 171-172, 221.

(13) Vgl. Herder-Dorneich: Wirtschaftsordnung, S. 26.

なお，これまでみてきたゲーレンの行為論のエッセンスをヘルダー・ドルナイヒにしたがって図示すると，図1のようになろう。(14)

図1



(14)　図1については，Herder-Dorneich, Anthropologie des pluraristischen Zeitalters, a. a. O., S. 38を参照されたし。

Ⅲ 経済社会へのひとつの応用

—ヘルダー・ドルナイヒによる場合—

1 三つの生存機能

ところで，すでに述べたように，ゲーレンの人間学を批判的に継承・発展させながら，経済社会の人類学的考察（anthropologische Betrachtung）—経済社会をそれを担う人類の観点から考察すること，言い換えれば経済社会が人類の変遷とともにどのように推移してきたかを考察すること—に応用しているものに，ヘルダー・ドルナイヒがいる。彼はゲーレンの人間学を経済学に取り入れるにあたり，その理由を次のように説明している。「経済学で用いられる人間の諸理論はその仮定においてひどく時代遅れで，しかも規範的なものであふれている。経済を営む存在としての人間に関する多様な陳述を新たに熟慮するための一つの手がかりを求めると，アルノルト・ゲーレンの人間学につきあたる。それは30年代の終わりに成立して以来広く承認され，社会科学的人間学のそれ以前の発展系譜に立ち返ることがほとんど必要でないと思われるほど，以前のものを自らのうちに総括している。」(S. 13) と。そして「以下においてゲーレンの理論が批判される場合，それはゲーレンの理論を論破するためではなく，一つの実りある手がかりとしてそこから前進するためである」(S. 13) ことが強調される。

では，ゲーレンの人間学のどこに問題があるか。まず，「客観的（生物学的）欠陥」と「主観的欠陥（欠陥意識）」とが区別されるべきことが力説される。なぜならば，ヘルダー・ドルナイヒによれば，欠陥それ自体は人類の発展の原動力であるが，そのより一層のダイナミックな発展をもたらすのは欠陥意識であり，したがって欠陥がみられても動態的な発展を示さない人類の一つの発展段階が仮定され得るし，また仮定されなければならないからである（p. 15-

16)。次に，「生存」Überleben）の定義が取り上げられ，その定義のもとでは「生きる」か「生きない」かだけでなく，どれだけ生きながらえるか，したがって「生命の持続」または「寿命見込み」も重要であるとされる。そして集団にもその概念が適用され，個人の純再生産率の大きさによる集団の生存状態，参入者や退出者の数，つまり人口代謝による集団の成長などが考慮されるべきことが説かれる（S. 17)。が，以下の議論にとって決定的に重要なのは，次の点である。すなわち，ゲーレンはユックスキュルの「環境」(Umwelt）概念を彼なりに修正して，その定義から「行為」が必然的に生ずるようにしたが，それは決して不可抗的（zwingend）なものではないと批判されている点がそれである。ヘルダー・ドルナイヒによれば，ユックスキュルの概念体系からはゲーレンのもとでおこなわれたよりも多様な生存機能（Überlebensfunkutionen）が導き出され得る。つまり，「ある生物にとってその解剖的構造（環境）と周囲とが一致する場合にその生存は最適化される」という観点のもとに，もし「解剖的構造」(Bauplan）と「周囲」(Umgebung）とが一致しない場合にはどのように最適な生存が確保されるかを考えるとき，少なくとも三つの方法があり得るという（S. 18)。それらを簡単に説明すると，次のようになる（S. 18)。

(A) 遺伝的適性（genetische Eignung）と生物学的適応（biologische Anpassung）

まず，「解剖的構造」が突然変異によって，あるいは風土への馴化や免疫化による生理学的な適応能力によって所与の「周囲」に適応する方法が考えられる。しかし，こうした生存機能は長期的にのみ効果的で，短い期間では非効率である。

(B) 周囲の交替（Umgebungswechsel）

次に，「解剖的構造」は不変で，その不変の構造をもってそれによりよく適合した別の「周囲」へ移ることが考えられる。

(C) 行為 (Handeln)

第三に，この場合も「解剖的構造」は不変であるが，Bの場合と異なって，別の「周囲」へ移るのではなくて，与えられた「周囲」を能動的に変化させることが考えられる。この生存機能は相対的にきわめて短い期間内において効果を発揮し得る点が特徴的である。

こうして，ヘルダー・ドルナイヒはユックスキュルの概念体系から少なくとも三つの生存機能が導き出され得ることを明らかにし，ゲーレンの力説する「行為」はそのうちの一つにすぎないことを示している。そして，人類の発展のもとでは，かかる三つの生存機能は順々に続くのではなく，きわめて多様な結合関係をもってあらわれることが強調される (S. 19)。この点については，次節で詳しく触れる。

2 人類の発展段階

ところで，上述の三つの生存機能の導出と並んで，ヘルダー・ドルナイヒのこの領域での顕著な特徴は，かかる三つの生存機能にもとづいて人類の発展段階を区分し特徴づけていることである。特に，ゲーレンの人間学のなかではいかなる場所もみいださないか，あるいは居心地のよい場所をみつけられそうにない発展段階，すなわち「行為の欠如する段階」(handlungslose Phase) と「行為の乏しい段階」(handlungsarme Phase) とが人類の歴史の初期に存在していたとのヘルダー・ドルナイヒの解釈は上述のゲーレンの行為論の相対化と関連して注目されるべきであろう。以下，ヘルダー・ドルナイヒの人類の発展段階論をみてみよう (S. 19-25)。

まず，人類の誕生から石器時代の頃までの時期は「行為の欠如する段階」(Phase der Handlungslosigkeit)，つまり「行為が概してなんらの役割も演じなかった段階」として特徴づけられ，この時期には明瞭な文化残滓もみいだされず，人間はひとえに「遺伝的—生物学的適応」と「周囲の交替」によって

生きながらえた。それが可能であったのは人口密度がきわめて希薄で，「広範な空間の原理」(Prinzip des weiten Raumes)，つまり「長い期間無制限に処分し得る生態学的空間の原理」が支配していたからである。そのような原理のもとでは，自然的な敵や脅威も存在せず，人間は生物学的な欠陥を意識することはなかった。

ところが，かかる時代が100万年以上続いて，石器時代が始まる頃になると，ゲーレンの意味における行為がみられるようになる。が，しかしゲーレンの見解に反して，それはまだ生存上必要なものというよりも，「問答しながら環境を試すこと」(das dialogisch fragende Experimentieren mit der Umwelt) がその中心をなした。その意味で，新しい時代は「行為の乏しい段階」，言い換えれば「散在的-反復的行為の段階」(Phase des sporadisch-repetierenden Handelns) とよばれる。ここでは行為は間に合わせ程度のものにすぎず，文化水準は最低で，停滞的であった。たしかに「行為」という能力の改善と拡張がしばしば試みられたが，それにもかかわらずそのような状態が数十万年以上も続いたのは，低い文化水準のもとでのつましい生存可能性から生ずる希薄な人口密度と短い平均寿命に主たる原因があった。希薄な人口密度は一方で「広範な空間の原理」の効率性を可能にし，それによって「周囲の交替」という生存機能を支え，決定的な生存機能が文化を創造する「行為」へと発展するのを妨げた。そして他方において，それは短い平均寿命と結びついて人間相互の接触を困難にし，それによって学習と発明の実行を難しくした。こうして文化水準は数十万年にわたって停滞したのである。

けれども，「遺伝的な適応」がきわめて長い期間を経て，徐々に効果を発揮してくる。人間のもとでは脳の容積の拡大という形でそれはおこなわれ，そのことに支えられて，人間は自らの生存機会を少しずつ改善してくる。正の純再生産率のうちにその効果は現れ，人類は着実に増加し始める。これによりすべての「生態学的なくぼみ」(ökologische Nische) はふさがれ，いまや，「行

為」が前面に現れざるを得なくなる。生きながらえようとすれば，新参者は先住者と闘い，彼らから有利な生活空間を奪い取るか，さもなければ人けのない，不利な自然条件のもとにある地方へ逃れ，そこで自然と闘うしかないからである。こうして，以前は散在的で反復的であった行為は連続的なものになり，それによって文化を絶えず上昇させる内的な力学を得る。ここに，「連続的-動態的な行為の段階」(Phase des kontinuierlich-dynamischen Handelns) が現れる。

ところで，「広範な空間」が過剰にあるもとでも闘争は起こり得るが，すべての生態学的空間がふさがれ，征服者から被征服者がもはや逃れ得なくなったときの闘争はそれとは異なって生存機会と文化の動態とに広範な作用を及ぼす。被征服者はいまや従者，臣下，隷属者，奴隷として征服者につかえなければならず，そのことによって，それまで大きなあるいは小さな群れをつくって点在して併存していた人間は「一つの頂点または中心」のもとに集められ，「上から下」へと階層化されはじめる。ここに「始めと終わりと真ん中」とによる編成という「ヒエラルヒー原理」(hierarchisches Prinzip) にもとづく社会，いわゆる階層（または階級）社会が成立してくる。そして上の階層が下の階層よりも有利な生活条件をもつことから，以前とは反対に支配と勝利に対して高いプレミアムが保障され，それが社会内部での上の地位をめぐる競争を惹起し，それによってより高い業績への圧力が生み出される。また，闘争や競争に対してより熟練していることから，階層社会はそれ以前の群れの時代よりもより効率的となる。かくして，生存機会は以前より大幅に改善され，それによってまたより高い文化水準が実現されることになった。

3 現代経済社会の特徴

ヘルダー・ドルナイヒによると，古代と中世から近代へと進むにつれて，「連続的-動態的な行為の段階」は次第に新たな段階に移っていく。「交差する

行為の段階」(Phase des kreuzweisen Handelns) または「交換の段階」(Phase des Tauschens) とよばれるものがそれである。そしてそれに対応して,「ヒエラルヒー原理」は徐々に「全体的相互依存関係の原理」(Prinzip der totalen Interdependenz) に取って代わられるという。では,かかる移行はどのようにおこなわれ,また新たに成立した社会はいかなる特徴を示すか。以下,これらの点についてみてみよう (S. 25-35)。

まず,移行に関しては,ヘルダー・ドルナイヒは「思いもかけず」(unversehens) という表現でそれを説明している。すなわち,「ヒエラルヒー的に形成された世界から脱出するように誘惑されるならば,このことが全く不可能であるという感じが真っ先に迫ってくる。けれども,人類は思いもかけず,根本的に別様に編成された新しい世界に入り込み,その新しい構造を人間自身が改造し始めるのである。」(筆者傍点) (S. 25) と。そしてそうした移行の背景として,「行為の多様性と行為の頻度の進行」によって人間の空間が行為で満たされ,二つの行為が同時に起こり,連続するようになったことがあげられ,そのことによって「一つの事物に向けて,一人の人間に向けて,『上から下』へ,もともと一方的に方向づけられた行為は反対行為に出くわし,行為は交差する」(S. 26) ようになったと説明される。

次に,特徴についてであるが,ヘルダー・ドルナイヒによると,行為と反対行為が繰り返され,それによって反対行為が「計画的」にともに引き入れられ,期待され,見越されるようになると,つまり最初は相互にいかなる接触ももたない二つの集団が偶然に探し求めた一つの場所で交互に贈り物をやり取りし始め,それが繰り返されることによって,贈られるということが期待をもって—それはしばしば失望に終わったりするが—計画的に組み入れられるようになると,以前とはもはや単純には同一視され得ない「一つの新しい行為組織」が成立する。それが「交換」とよばれるもので,行為と反対行為という「二つの構成要素から構成される一つの複合的な構造」を示す。そしてそうした交換

のもとでは「価格」が形成され，その価格の上がり下がりによって，交換されるものの需要量と供給量とが調整されることになる。ここに「市場」の成立がみられる。

ところで，「一般的妥当性をもつ普遍的な交換手段」—家畜や貝，たばこ，鏃，さらには金や紙幣など—の発展によってつねに新しい財が交換組織に引き入れられ，ますます多くの交換活動がつなぎ合わされて，長い「行為連鎖」を形成するようになると，初めは「散在的-反復的」であった交換は「連続的-動態的」なものに移行する。そして連続的な交換とそのもとでの分業のより大きな効率性は全行為に占める交換の割合を絶えず増大させ，分業を促進する。そのことによって，それまでには予見もされなかった人口の増加が可能となると同時に，そうした多数の人口（大衆）はより一層の分業と交換によってのみ扶養され，維持され得ることになる。こうして「交換社会」(Tauschgesellschaft) と「大衆社会」(Massengesellschaft) は相互に前提しあい，個々人はますます連続的-動態的交換と分業の組織のうちに組み入れられ，生存を危うくすることなしにはそこから逃れられなくなる。

他方，分業と交換はなにが生産され，なにが交換されるべきかに関する情報を前提とする。そのような情報は「言葉」(Sprache) と「書き物」(Schrift) によっても伝達され得るが，高度に分業化され，連続的-動態的行為で満たされた大衆社会では絶えざる情報入手と伝達が必要であるから，その点からみると，それらは不器用である。そこでもともとは長い原文から次のような，すなわち「最終的には純粋に価値的数字に還元される，規格統一された不変的事項を伴った短い書式」がつくりだされ，そうした「短い書式と価値的数字」(Kurzformeln und Wertziffern) のうちに凝結されて，情報は伝達されるようになる。そのような情報の担い手が「証書」(Schein) とよばれるもので，紙幣や小切手類だけでなく，投票用紙，診察券（保険証），乗車券，食券，パスポートなどがそのようなものとしてあげられる。そして，いまや，財と財と

が交換されるのではなくて，財と証書とが交換されるようになる。

ここで，次の二つの点に注意したい。一つは，証書に投票用紙があげられていることから推察されるように，ここにきて，交換概念がいわゆる経済的市場だけではなく，政治的選挙や利益集団内部の選挙，さらには集団交渉にも適用されていることである。それは，今日の選挙や集団交渉が市場と同一の基本構造（交換という）を示すとみなされているからである。かかる見方は，すぐあとで触れる現代社会の捉え方と結びついて，ヘルダー・ドルナイヒの一つの特徴をなす。いま一つは，ヘルダー・ドルナイヒ自身は明確に述べてはいないが，彼のいう証書は，ゲーレンの言葉を用いれば，「負担免除」の機能を果たし，交換と分業を円滑におこなわしめるものとして位置づけられ得るということである。この点はゲーレン説が経済社会学的分析に応用され得るもう一つの点であろう。

ともあれ，「交差する行為の段階」が到来し，交換が広範かつ連続的におこなわれるようになる—それに伴って財と財ではなく，財と情報の担い手（証書）とが交換されるようになる—と，一つの頂点から人々を一方的に支配することは難しくなり，そのことによって以前の社会の統合原理，「ヒエラルヒー原理」はますます押し退けられるようになる。そしてそれに代わって重きをなしてくるのが「全体的相互依存関係の原理」とよばれるものである。その原理の意味していることは，ヘルダー・ドルナイヒによれば，「すべてはすべてと関連する」，一口で言えば「真ん中の喪失」（Verlust der Mitte）ということである。したがって，そのような原理のもとでは「行為するいかなる主体も社会のありうべき中心となる」。ヘルダー・ドルナイヒはかかる原理に相応する世界像を「多元主義的世界像」（pluralistisches Weltbild）とよぶ（S. 32-35）。ここで，ヘルダー・ドルナイヒのいう多元主義が今日広く用いられている多元主義，すなわち多数の利益集団によって社会が分断・構成されている状態を指

すのでは必ずしもないということは注意されるべきであろう。[15] もとより，現代の経済社会が完全にかかる世界像のようになっているというわけではない。が，「我々の生活のなかでは，伝来のヒエラルヒー的な行為組織によって規定される領域はますます少なくなっている」(S. 34) として，多元主義的世界像—ヘルダー・ドルナイヒのいう意味での—の現代における分析上の意義が強調される。そして，そうした世界像のもとで人間はどのように最適な生存を確保していくかが詳しく分析される。この最後の点については，別の機会に検討を加えたい。

おわりに

以上において，我々はゲーレンの人間学とそれを批判的に継承・発展させながら経済社会の分析に応用しているヘルダー・ドルナイヒの学説とを検討してきた。前者は従来の人間解釈をきびしく批判して，新たに生物学的な生存条件から人間存在を明らかにしようとして，まず人間の「行為」，すなわち予見と計画にもとづいて自然や現実を変更させる活動に着目し，その活動が人間の身体的もしくは器質的欠陥—ここから人間は「欠陥生物」とよばれるが—から必

---

(15) 多元主義の概念については，野尻武敏『選択の時代』新評論，1980年，13-15頁を参照。そこでは，①社会の全体構成に一般的な多元性を強調する分析社会学的な概念，②社会全体の構成部分の多元性よりも構成諸部分を全体へと整序し統合する原則や原理の多元性を主張するもの，③社会や経済を動かす勢力の多元性を指すもの，④世界に多くの中心的な政治勢力や社会経済体制が併存し競合している状況を指す概念，の4つの主要な用法があげられている。社会が多数の利益集団に分断・構成されていることを指す多元主義は③の用法であるが，ヘルダー・ドルナイヒのいう多元主義は上の4つの用法には該当しない。一見して①の用法に近いようにみえるが，特定の歴史的状況を指している点で，それとは根本的に異なる。結局，分析的概念でも統合原理でもなく，また世界的レベルのものでもないということでいえば，大きく分ければ，③の部類に入るであろうが，多数の独立した個人が中心に据えられていることから，それらとは別個に分類されるべきであろう。

然化されるものであることを突き止め，そこから精神的作業の必然性の根拠を導きだすことによって，心（または精神）と身体の関連の問題，いわゆる「心身問題」に対して経験科学の枠内で一つの解答を与えようとした。他方，後者はゲーレンの人間学，特に行為論を相対化して，必ずしも人類の初めから行為が人間の生存確保の条件をなしてきたのではないとして，行為のほかに二つの生存機能を導出して，そのうえに独自の人類発展段階論を展開した。いずれも，非常にユニークで，しかもきわめて説得力がある。が，人間の尊厳の問題は別にしても，以下の点に若干の不満を感じざるを得ない。

ゲーレンもヘルダー・ドルナイヒもともに人間の生存条件を問い，自然の計画的変更，すなわち「行為」の意義を強調している—もっとも，ヘルダー・ドルナイヒは人類の初期の段階については「行為」以外の生存機能に力点を置いているが—が，そのもとでは人間の身体的運動と精神的要因との結びつきに重きが置かれ，行為の社会的側面—自然の計画的変更が多数の人々のさまざまな協力のもとにおこなわれるということ—，より一般的には人間の社会的側面，つまり人間の生存にとっての社会もしくは社会的協働の意義や必然性，さらにはその根拠については必ずしも明確にされてはいない。人間は古来より「社会的動物」といわれてきたし，人類の初期の段階はともあれ，今日では多数の人々の協力なしには，したがって社会や社会的協働なしには人間の生存は考えられない。ヘルダー・ドルナイヒはまさにそうした観点から経済社会の調整問題の重要性を強調しているのである。とすれば，社会とか社会的協働の意義や必然性について明確にし，その根拠を示すことはきわめて重要なことであるといわざるを得ない。

Gehlen' s Anthropology and an Application of It to the Economic Society

Yasuaki Nagaya

How can man continue to live? It is not too much to say that the problem is one of the most important to all social sciences, especially economics and economic sociology.

Now, such problem is foundamentally related with that of the mode of human existence. Because the way of human living is different according to the mode of human existence. Concerning the latter problem, untill to the present, various interpretations have been made. In this paper, one of those, A. Gehlen's anthropology is taken and examined. It criticizes all former anthropologies and offers an unique theory of human existence. One of it's most important features is that it explains the problem of human existence from the biological conditions of human living. And that the conception of "act" used there as a key is analogous to that of labour used in economics, is probably a principal reason that German economic sociologist, Ph. Herder-Dorneich applicates Gehlen's anthropology to the analysis of the economic society. And then in this paper it is examined how Herder-Dorneich did it, too.